
しりとり

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しりとり

【コード】

N3758Q

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

さあ！ 《しりとり》を始めようじゃないか。

(前書き)

登場人物は二人ですが、全て会話調で書いています。少し見づらくも
かもしねません。

「じゃあ、今日は《しりとり》でもして、遊ぼうか」

「は？ 《しりとり》？ そんな幼稚な」

「しりとりをバカにしたら、いけないぞ」

「でも、子供の遊びですよ」

「まあ、そう言っな。ほれ、始めるぞ」

「仕方ないですね。分かりましたよ。付き合いますよ。どうぞ、初めして下さい」

「では、オーソドックスに《しりとり》の《か》から始めるぞ」

「は？ 何処がオーソドックスですか！ 《しり・と・り》の中に《か》なんて無いでしょ！」

「まあ、そう言っな。じゃあ、始めるぞ。それでは、いくぞ！ 初めは《車》だ！」

「え！？ 《か》じゃ無いじゃないですか！ まったくもう！ 車ですね！ じゃあ、僕は《マリモ》です」

「《モ》、か。では私は、《盲目》だ！」

「また、《く》ですか。それじゃあ、僕は、《鯨》で」

「ほう、なるほど。では、《楽》でござい！」

「また《く》ですか。……《果物》です」

「能力」

「《く》！……苦楽！」

「ははは！ 《く》返しか！？ しかし、あまい！ 《九九》でど
うだ！」

「クソ！ 《く》《く》《く》……薬で」

「リンク」

「クリック」

「苦」

「あゝ！ 《く》から脱出したい！ クリスマスだ！」

「スナック」

「熊」

「幕」

「草花」

「奈落」

「唇」

「ルクセンブルク」

「首輪」

「粹」

「あゝ！ もう《く》ばっか嫌だ！ クッソ〜！ ……杭！」

「インク」

「……黒」

「六」

「国」

「肉」

「空気」

「禁句」

「クライアント」

「トランク」

「黒字」

「軸」

「管」

「墮落」

「くじ引き」

「気楽」

「食い倒れ」

「連続」

「クラブ」

「部落」

「薬箱」

「コルク」

「くっ！ ダメだ！ 《く》から抜け出せない。……そうだ！ 《九》」

「駄目だな。それは、さっき私が言っただろう」

「いえ、さっき言った《く》は何ですか？」

「苦しみの《苦》だ」

「じゃあ、僕は数字の《九》です」

「なるほど。そういう事か。では、私は《クイック》だ！」

「クソ！ やっと形勢逆転かと思ったのに！ じゃあ、区画で

「ほう。では、空腹」

「鎖」

「リュック」

「空港」

「歌」

「やった！ 《く》からの脱出成功！ タンク！」

「宮内庁」

「海」

「ミンク」

「は！？ また《く》！？ ……草刈」

「リメイク」

「暗闇」

「ミュージック」

「空白」

「クラシック」

「組み合わせ」

「制服」

「クエスト」

「トラック」

「口」

「チーク」

「ハアハア！ もう《く》ばかり嫌だ！ うん！ ……空室」

「対句」

「雲」

「文句」

「駆逐」

「口紅」

「ニューヨーク。へへっ！ 今度こそ、形勢逆転ですよ！」

「やるなあ。じゃあ《クロック》でどうかな？」

「えっ！？ また《く》！？ 組合」

「イラク」

「克蘭ク」

「クリニック」

「靴」

「通学」

「《く》……《く》うう！？ えっつとお、草野球」

「ウサギ」

「逆！ へへっ！ やったぜ！」

「そんなに喜ぶ事かね。《く》なんて、いくらでもあるだろう。例
えば、工夫とかね」

「《う》！？ ……《う》で《く》に繋がる言葉が見つからない！
クソッ！ 浮き輪！」

「ワンピース」

「やっと、まともな《しりとり》らしくなってきましたね。じゃあ僕は、スイカで」

「そっだといいいねえ。……じゃあ私は、慣用句といこうかな？」

「そんなの大丈夫でしょ！ 国々です」

「なるほどね。余裕が少し生まれたみたいだね。ニンニクなんてどうかな？」

「空爆です」

「供養だよ」

「ウナギです」

「牛肉なんてどうかな？」

「クラッシュ」

「輸出国」

「空気圧」

「梅雨」

「夢」

「メイク」

「くるぶし」

「シヨック」

「訓練所」

「四駆」

「駆除」

「予約」

「クリーム」

「ムンク」

「よくもまあ《く》に結び付く言葉ばかり思い付きますね。でも、負けませんよ！……車椅子なんてどうですか？」

「数学」

「クローバー」

「クローバーって事は、《ば》だね。じゃあ、バイクだ」

「ロロミ」

「ミミズク」

「クラスメート」

「東京」

「また《う》か……。《う》で《く》に繋げる言葉、思い付かないんだよなあ。乳母でいいですよ」

「バンコク」

「いい加減も飽きてきましたよ。でも、絶対負けませんからね！
じゃあ僕は、九十九里浜です」

「マイクだよ」

「クウエート」

「トリアルでいいよ」

「久しぶりに休憩ですね。じゃあ、ルールで」

「累計」

「移動です！ 《う》なら《く》にされる事ないですからね」

「そうだね。じゃあ、裏腹で」

「ランク！！ 形勢逆転だあ！！」

「釧路かな」

「蠟燭」

「ほう！ やるねえ！ クロスワード」

「ドラマチック」

「クールなんてどうかな？」

「今度は《る》ですか！？ くそおっ！ 《る》で《く》に繋げる言葉が出てこない！ くそおっ！ 僕は、ルアーフィッシングでいいです！」

「グラビアアイドルでどうかな？」

「また《る》ですか？ これって、イジメじゃありません？ 遊びですよ？」

「何故、私が君をイジメないといけないんだよ。遊びだよ。ただの遊び。『言葉遊び』というヤツだ」

「そうですね。分かりました。続けましょう。じゃあ、《る》でしたよね？ ……ルールブックです」

「なかなかやるようになってきたねえ！ じゃあ、組長つてのはどうかな？」

「裏です」

「ラジオ局だ」

「……………。……………!! 孔雀っ!」

「そんなに気合い入れなくても……………。ふふっ、よっぽど負けず嫌いなようだね。では私は、食いしん坊でいいよ」

「裏切り者です」

「農薬。また、《く》に戻ってしまった。ごめんだよ」

「いいですよ。返せばいいだけですから……………。下り坂です」

「あまり《く》ばかりは可哀想だから、今回は蛙にしておくよ」

「ええ〜!! 　また《る》ですかあ!？ 　じゃあ、留守番電話でどうですか?」

「じゃあ脇役にしておくよ」

「はあ……………。《く》になって返ってきたよ。…………クワガタ虫です」

「写楽」

「空想科学です」

「やるじゃないか! 　君主でいいよ」

「夕刻」

「ここにきて、《く》攻めに合うとは予想もしていなかったよ。でも、私も君に負けず劣らず、負けず嫌いなんだ。では、空前絶後といこうかな？」

「合格です」

「全く、私は合格ではないのだけどねえ……。それじゃあ、蜘蛛といこうか」

「モザイクでは、どうですか？」

「私にモザイクをかけたようになってきたよ。でも！ 鞍馬天狗でどうかな？」

「グアム島でいいですよ」

「有象無象といこうかな」

「右往左往で如何ですか？」

「ほほう！ また《う》だな。今度は、ウィークといこうか」

「え！ またここにきて《く》かよお！ 負けたくない！ 負けたくないけど、もう面倒くさい！ ああ〜！！ ……クリスマスイブでいいです！」

「そんなに、ふてくされなくてもいいじゃないか。ただの遊びだよ。『言葉遊び』だ。まあ、とりあえず、続けるよ。文学といこうかな？」

「屈辱です」

「何！ここにきて！私の方が屈辱的だ！そうだな、クナイで返そう」

「インストールでいいですよ」

「なんだか同じような文字ばかりが出てくるな。もう、この遊びをインストールしたくなってきたよ。まあ、冗談はさておき、ルービツクキューブといこうかな？」

「ブラジルで返しますけど、いいですか？」

「ルミナリエでどうだ！」

「エルサルバドルといきましょうか？」

「ルノアール！」

「ええ〜！！ 《る》返しい！ ってルナです」

「生ビールってどうだろう」

「はあ。もう止めませんか？ 僕、本当に今生ビールが飲みたくなりましたよ」

「そうだな。そろそろ終わるか。じゃあ、終わってくれていいよ」

「じゃあ、ルームメイトで」

「それじゃあ終われないじゃないか！ 最後に《ん》の付く言葉を言うんだよ。分かっているよね？」

「はい、分かっていますよ。だから、終わって下さいよ。どうぞ」

「なるほどな。そういう事か。じゃあ私は、トピックといこうかな？」

「あれ？ 《ん》が付いてませんよ。しかも、よりによって《く》で返してくるし……。そっちがその気なら、百済といきましょうか」

「ライブハウスだ」

「睡眠妨害ですよ」

「インフルエンザだ」

「雑学でどうですか？」

「《く》？ 今此处で《く》？ あゝ！ もう止めた！ 口説き文句だあ！」

「何が『もう止めた！』ですか！？ しかも、《く》返し！！ 本当に止めますからね！ もう負けてもいいや……。ちくしょー！
！くくく……。ねえ、このまま終わりませんか？」

「ん？ あ、ああ、そうだな。このまま終わるか。なんだか二人とも負けず嫌いみたいだしな」

「じゃあ、これで終了ですね」

「よし！ 終了だ！」

「じゃあ、この空腹感を満たしにいきましょうか！？」

「そうだな行こうか！！ 私の勝利って事で」

「どうして、あなたの勝利なんですか！！！」

「どうしてって。今、お前《空腹感》って言ったじゃないか。言っ
たよな。飯に行くぞお！！！」

「え。ええ〜！！ それって、終了って言った後の事じゃないです
か！？ ねえ！ 聞いてます？ ああ、もう！！！」

(後書き)

感想など頂けると、考えた甲斐があります。
読んで頂き、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3758q/>

しりとり

2011年1月28日16時07分発行